

# ミネソタ便り

05・01・17 平野茂樹

学校報告編 1 なにを教えるか

.....

私が1年間と言う限られた期間で行う授業のため準備してきた教材は二つである。

日本語と日本人の文化(野生)である。

日本語は、「あいさつ」「かず」「いろ」「からだ」だけ。それも日常使う範囲の基本的なものだけである。

日本人の文化は、日本の民話で紹介することにした。

民話は私が直接聞いたことのあるものを選んだ。全国区のものから地方区のものまで数多くあるが、

直接聞いていないものは、私のからだに反応しないのでやめた。英訳した次の民話を用意した。

「金太郎」「したきりすずめ」「ぶんぶく茶釜」「鶴の恩返し」「一寸法師」「さるかに合戦」「花さか爺さん」「かぐや姫」

「浦島太郎」「桃太郎」「かさ地蔵」「かちかち山」「てんぐのかくれみの」「ねずみのよめいり」「七夕さま」「三年寝たろう」「三枚のお札」「わらしべ長者」の18話である。

民話を選んだのは、まだ、一般の村びとや里びとにとって学校がなかったころ、身近な父さん、母さんや爺さん婆さん、それに近所のおじさんおばさんが子供に巣立つまでに教えていた生きるための野生だと思っているからである。

共通していることは「昔あるところに」であり、お爺さん、お婆さん、動物、自然、空

などがでてきて、それらが擬人化され、同じ価値で扱われていることである。そして「だったとさ」で聞き手も話し手もなぜか納得して終わるのである。聞いたあとの説明はない。なくても何が分かり、何が分からないかが感じられるようになっているのである。ただ、話し手と聞き手が近づいた実感だけで充分なのである。聞いた後は、気持ちよく、安心して寝た覚えもある。野生動物の子育てにそっくりでしょう。

日本語の方は、私が日本で英語を10数年間学んだが挨拶ひとつできなかったことを反省し、欲はかかず、話し言葉として覚えられる範囲にしばった。

あいさつは、朝起きてから夜寝るまで日常使われるものを日米比較しながら覚える。

.....

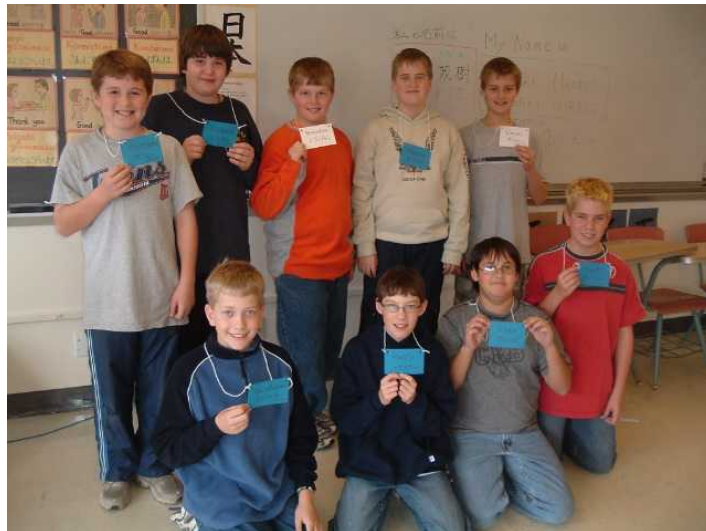
かずは、数え方だけにした。人間は5本の指があり、両手で数えたので10進法。5本以外の動物は、どんな数え方をしているのであろうかを想像する? ある周期を持って繰り返されている日々

(暦)を理解するために使った12進法。生活に必要な月、曜日も数え方のひとつにした。

いろは、10色「あか」「あお」「き」「ちや」「みどり」「むらさき」「もも」「だいたい」「くろ」「しろ」である。

からだは、あたまの髪の毛から足のつま先までの名前である。

1年間でこれだけ日本語を覚えれば充分過ぎるであろう。また、覚えることが目的ではない。比較しながら考えるのが目的にしてあるが、この方がいまのところ自然に覚えてしまうのだから不思議だ。



全生徒同じテーマである。伝え方と考え方の範囲はおのずと違ってくるが。

.....

まだ始まったばかりなので、授業をした部分から報告したい。

その前にまた一言。

私は、直接ミネソタに来て学校に赴任したわけではない。1ヶ月間ワシントンDCで見習い研修を受け、KindergartenからHigh Schoolまで、授業のObservationをさせてもらってから赴任した。

いろいろな先生や経験者、関係者から話を聞いたり、手法を教わったりしたが、私が理解した範囲でアメリカの児童教育の実態を述べておきたいと思う。分かりやすくするため多少メリハリをつけた表現になっているかもしれない。

アメリカの教育のGoalは、良き市民を作ることとリーダーを育てることに徹しているように思える。

このため、ある目的で勉強をするとき、出来の悪い集団もしくは個人をどんな条件であろうともひとりの落ちこぼれもないよう面倒見ること。これが良き市民をつくることになると思っている。

また、出来の良い集団または個人を出来る限りのばすこと。これがリーダーを育てることになると徹底している。

.....

具体的には、教室で教えるのは、先生だけではなく早く覚えた生徒が先生の助手になりみんなの面倒を見るのである。

ある生徒は、音楽が得意で算数が不得手だとする。この生徒は、音楽の時間は、先生の助手としてみんなの面倒を見るが、算数の時間には、面倒を見てもらう。個人の中にエリートと落ちこぼれの二面を常に意識できるようになっている。エリートの部分を伸ばし、落ちこぼれのところを普通にする。これが教



育方針なのである。

外から見ると中間層はほっておかれるのである。上層部を伸ばし、下層部を救済する。これが教育システムの図式である。

日本は全く反対であろう。中間層のレベルをあげるため上層部と下層部を犠牲にする。これを公平で平等な教育だと国をあげて信じている。このため学校外で上層部を伸ばし、下層部を救済しなければならない構図になっており、教育産業が栄え、お母さんが忙しい。

日本では、広い範囲で可もなく不可もないのが、試験という開門を抜けられ、学歴が良くなり、なにも特徴がなくても、学校の科目以外で落ちこぼれていても、良い学校、良い会社、よい組織と言われるところに入れるようになっているようだ。

.....

私には、日本のつくられたエリートは「偏差値は高いが幼児性も高い人間」に見える。これを育てているのが開国後あわてふためいた明治以降の日本の教育であろう。

いつの時代でも国の教育制度に関係なくすくすく育っている人間も必ずいるので、全体を悲観したものではないが、公費で行う事業と言う観点で教育を考えると米国方式に軍配が上がるように思えるのである。

アメリカにも教科書に相当するものはたくさんあるが、日本のように文部科学省が定めた教科書の範囲に沿って進めると言うことはない。常になにを選んでどのように教えるかも自由競争である。

こんな180度に近い方針の違いの中で行っているのを白を黒、黒を白と翻訳しながら聞いていただきたい。

学校編の初回は、この辺で。